
仮面ライダーキバ ―お嬢様は仮面ライダー―

ヴィス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーキバ ―お嬢様は仮面ライダー―

【Nコード】

N2061Y

【作者名】

グイス

【あらすじ】

20XX年、世界はファンガイアによって滅ぼされようとしていた。しかし、それに立ち向かう少女がいた。その少女は仮面ライダーキバであった――

20XX年、世界はファンガイアによって滅ぼされようとしていた。しかし、1人の少女が立ち上がり、世界を救おうとした。

「見つけたわよ、ファンガイア」

「なっ、お前は……」

「にひひっ、行くわよキバット」

「俺様は上機嫌だぜ、ガブツ」

キバットと呼ばれるコウモリの形をした機械が、少女の指に噛り付く、するとキバットから機械音が鳴り、キバットの目が白と赤に点灯させる。機械音が2秒くらい鳴ると、少女の腰にベルトが巻かれる。

「変身」

ベルトにキバットを付けると、少女は黒と赤を基準としたライダー仮面ライダーキバに変身した。

「キバッて行くぜ」

「このガキがキバだと……？」

「ふん、アンタみたいな怪物が私を知ってるなんて……あまり光栄じゃないわね」

「ほざけ、このガキイ……っ!!」

スパイダーファンガイアはパンチを繰り出すが、悠々と避けるキバ。今度はキバの番、キバはキックキックと3回して最後の1回は回し蹴りで決める。

「決めるぞ」

「OK」

キバは赤い笛をキバットの口に射し込む。するとキバットは電子音の後に「ウェイクアップ!」と叫ぶ。

するとキバの周りは暗くなり、キバは高く空へと飛ぶ。

「ど、どこだ? どこにいきやがった!」

「はあーーーーー!!!!!!」

スパイダーファンガイアにキックが直撃する。キック後、地面にキバの紋章が刻まれる。

「ふん、私に逆らうからよ」

そう言っ変身を解く。彼女こそファンガイアを倒すために生まれた仮面ライダー 仮面ライダーキバだ。そして彼女の名前は水瀬伊織 765プロの元アイドル。

「さて、帰るわよ。キバット」

「待ってくれ、キャッスルドラン」

キャッスルドランのフエッスルで吹く、するとキャッスルドランが現われ、魂となったスパイダーファンガイアはキャッスルドランによつて飲み込まれる。

「よっしゃー、帰るぞー」

「あつ、待ちなさいよ！」

伊織がなぜキバになったのか、それは数ヶ月前のこと。伊織の家はあるファンガイアに襲われ、尚且つ親を殺された。しかし、親の最期の言葉「地下にあるモノを隠した」と言う。その謎を解放つために水瀬家の地下へと移動。地下に着くとドデカイ扉がある。開いてみると、奥に箱がある。そしてその箱を開けるとコウモリ型の機械が置いてあった。それが初めて伊織がキバットに逢ったときだ。

伊織が家でゆつたりしていると、ファンガイアの気配に気付く。そのファンガイアの場所に行つてみると、ある人が倒れていた。その人の名は高槻やよい 765プロで伊織の大親友。その彼女が傷つけられて黙っていられるはずもなく、伊織はファンガイアの居場所を突き止める。

「キバット、変身よ」

今の伊織は殺気かなりある。無理もない、大親友を傷つけられた

のだから。そして、誰も止められない。

「キバツて行くぜー!!」

「まずはこれで行くわ」

取り出したのはガルルフォームにチェンジ出来るフェッスル。そのフェッスルをキバツトに差す。

「ガルルセイバー！」

暗黒、それしか例えがないぐらい黒いオーラを放っている。

「はっ！ やっ！」

ザン、ザンと斬り付ける。さらにもう一度斬る。

「まだまだア！」

斬り上げる。

「たア！」

今度は斬り下げる。

「ま、待て、あ、謝るから許してくれ！」

「許す？ 何を言ってるの？ あなたはとても重い罪を行なったのよ。それにね、敵に情けを掛けるほど、私は甘くないの」

「く、くそお!!!」

殴りかかるがまるで効かない。何度も掛かってくるが、伊織は避けるか受けとめるだけだ。

「効かないわよ、そんなへつぽこな攻撃なんて」

「な、何でかねえんだよ！」

「いい？ 世の中には人を守ること**で強くなる人も**いるってのを覚えてとくといいわ」

いやだ、いやだ、その言葉しか発せなくなるほど強烈殺気、それと同時に悲しみも浮き上がっていく。

「最後に残しておきたい言葉はある？」

それに対してファンガイアは「イエ」と答えた。そしてキバツトは「ガルルバイト!」と叫んで、伊織は低姿勢で高く飛び上がり、一刀両断。

「ガルル・ハウリングスラー……ツシュ……!!!!!!」

⌈
⋮
⌋

「伊織……」

「……お願い、少し1人にさせて」

「……分かった」

伊織は誓った。もう、同じ過ちを繰り返さないと……

（後書き）

みなさん、今晚、ヴィスです。今回仮面ライダーキバをお読みに
なつて下さつてありがとうございます。

こんな駄作者ですが、どうか見守ってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2061y/>

仮面ライダーキバ —お嬢様は仮面ライダー—

2011年11月4日05時21分発行